16) 展示される身体—東京大正博覧会の「通俗衛生博覧会」および「美人島旅行館」を巡って

The Human Body Displayed in "Tokyo Taisyo Exhibition"

九州歯科大学　○安細敏弘，竹原直道

Toshihiro Ansai and Tadamichi Takehara, *Kyusyu Dental University*

はじめに

1914（大正3）年3月20日から7月31日の間，東京・上野公園において「東京大正博覧会」が開催された．観覧者は750万人，大正時代の幕開けとなる大博覧会であった．第一会場には国力の発展を示す工業館，林業館など，第二会場には植民地の特設館が多数建設された．大衆向けの娯楽施設も多く，日本初のエスカレーター，軍艦三笠の実物大模型，ロープウェイ，鉱山模型館，演芸館，さらには木乃伊座禅館などもあった．そのなかに二六新報社という民間経営ながら，博覧会では初めての衛生館が「通俗衛生博覧会」という名称のもと開設された．本報告では，この「通俗衛生博覧会」の展示物の概要とその意味を検討するとともに，『東京大正博覧会観覧案内』が余興館の「第一に挙げなければならない」という，いわば生身の身体展示館ともいうべき「美人島旅行館」についても考察したい．

「通俗衛生博覧会」の展示

東京大正博覧会の衛生展示は二か所あり，一つは博物館の衛生経済館で，伝染病研究所，赤十字社などが出展していた．もう一つは「通俗衛生博覧会」と称したもので，不忍池の水面上に建設された延約300坪の2階建てバラック建築であった．二六新報社・中村瞬二の回想録『呑牛撲稿』（1961）によれば，1階が一般展示室，2階の一部に特別秘密室があり，特別料金を徴収したという．展示物には，妊孕（にんよう）ノ順序・妊娠十ヶ月ノ胎児・陰嚢象皮病ニ依ル大睾丸・「マラツカ」ニ於ケル伝染病隔離所模型・巨大脂肪腫ノ実物及写真・胃粘膜ノ胃液腺組織模型・肺呼吸作用模型並ニ諸模型ヲ運転機といったものがあり，歯科展示物としては齲歯ノ模型・歯楊枝ノ使用法図解があった（「通俗衛生博覧会」記念絵はがき）．また特別秘密室には東京帝大医学部より貸し出された高橋お伝の全身の皮膚あるいは全部が左前（反対）の内臓といったものがあったという（『呑牛撲稿』による）．民間病院からは後に東京慈恵会医科大学の初代学長になる金杉英五郎が人間の首約十級を出展した．

「美人島旅行館」について

「美人島旅行館」は第一会場の中心部にあり，「通俗衛生博覧会」が後から追加されたパビリオンであったのと比べて，余興館の目玉的扱いであった．ネーミングによるイメージが大きいが，江戸川乱歩の作品など昭和初期「エロ・グロ・ナンセンス」文化へも影響したと思われる（『パノラマ島奇譚』〈1926-27〉など）．「美人島旅行館」は大阪天王寺のルナパークにあった「美人探検館」にヒントを得たものであった．『観覧案内』は，美人の募集に「遠く東北の凶作地，北海道，さては名古屋地方までも，美人の買出しに出かけた」と書いている．出し物は女優髷に洋装した美女の火炎美人，幽霊美人，水中美人，ヤンキーダンスなどであるが，開会式後に出た『東京大正博覧会案内』には，前評判にもかかわらず「見物した人はあまり褒めない」とある．所詮俄作りの寄せ集めだったせいもあるだろう．「通俗衛生博覧会」がもっぱら人間の臓器や特異な疾病標本を展示したのに対して，「美人島旅行館」は「演芸館」に拠った芸妓に対抗する形となった（林葉子〈「醜業婦」と「美人」のあいだでゆらぐ芸妓像〉キリスト教社会問題研究58：77-104，2010）．明治から大正期にかけての芸妓は，江戸時代に極めて敷居が高かった吉原の遊郭文化を凌ぐ存在となっていた．吉原の花魁は，いかに教養が高かろうと結局人身売買の結果であり，明治以降廃娼運動の標的となって，その地位？は低下していた．それに代わって女性の自由職業（実態はともかく）であるとして，また明治政府要人が芸妓出身者を相次いで妻に迎えたこともあ

り，女性のなかでのいわゆる「社会的地位」は逆転していた．大正博の翌年，1915年11月16日におこなわれた御大典奉祝の芸妓行列は壮観で，芸妓パワーの一大デモンストレーションであった．なぜかその日には芸妓連が熱狂する群衆により乱暴されるという「芸妓行列騒擾事件」まで発生している．芸妓は「東京大正博覧会」の開会式においても，来賓高官とともに多数が揃いの前掛けを着用して参加し，その存在をアピールしていた．芸妓パワーが最高潮に達した時期であったろう．そういう意味で「美人島旅行館」は「演芸館」に拠った芸妓連に完敗したといえる．芸妓連が強力な三味線部隊を持っていたことも大きいだろう．一方「美人島旅行館」の音曲がどの様なものであったかは不明だが，どこにも記録が見当たらないところから貧弱な楽団であった可能性はある．しかしその後大正から昭和へと移るにつれて，洋装のレヴュー団が次第に優勢になって行く訳だから，「美人島旅行館」は芸妓の凋落の始まりを告げるものであったのかもしれない．

考　察

ところで「東京大正博覧会」における身体展示企画の全体像を俯瞰してみると，「通俗衛生博覧会」および「美人島旅行館」に留まらない．「木乃伊座禅館」ではミイラの展示もあった．特に生身の人間の展示が行われたのは，「南洋館」においてであった．生身の人間を展示するという動きは，大阪の「第五回内国勧業博覧会」(1903) での「学術人類館」を嚆矢とする．この時いわゆる「人類館事件」が起こっているが，詳細については『人類館—封印された扉』(2005) を参照されたい．生身のアイヌや台湾先住民を展示する試みは，その後も明治記念拓殖博覧会 (1912) などに受け継がれた．ここでは「南洋館」の例を見ておきたい．雑誌，実業之日本の「大正博覧会写真号」には，「南洋館と南洋喰人種」という記事があり，「蘭領ボルネオ島の喰人ダイヤーク人種」という説明でボルネオ島先住民の写真が載っている．展示されたのは「今度わざわざ南洋から同伴して来た土人は二十五人」という大人数であった．

ボルネオ島での人間見世物については，森嶋中良の『萬國新話』(1800) に興味深い話が載っている．それは「日本人を見世物にす」というもので，日本人の船乗り3人が奴隷として売られ，ボルネオ島ソウロクという町で見世物にされているというものである．1800年頃は鎖国中のはずだが，「そもそも鎖国はなかった」という最近の知見に合致する話ではある．大正博覧会全体でみると，奇病・奇形の人体標本やミイラ，死体から生身の「喰人種」や美人に至るまで，何でもありの身体展示であった．

まとめ

以上のように「東京大正博覧会」は，人体なかんづく人間に対する剝き出しな関心が抑制される事なく頂点に達した博覧会であった．この博覧会の展示企画がいくつもの看過しがたい問題点を含んでいることは明白である．時代背景を考えずに今日の視点から，これを批判することは容易い．しかし過去を変えることはできない以上，我々は過去の歴史を直視し，それを未来へと語り継ぐ使命があると考える．